

特集

# 規範感覚を育てる

学校や社会にはさまざまな規範がありますが、それらを守れない子どもの姿が目立つようです。子どものルールやマナーへの感覚や意識は、どうなっているのでしょうか。ルールの指導やしつけはどのようにすればよいか、規範意識の基礎・土台となる感覚を育てるために、教師や親は何ができるか、考えます。



## 子どもの規範感覚・規範意識の現状と課題 ——何を問題にしているのか、どう対応すべきか

国立教育政策研究所生徒指導研究センター総括研究官

滝 たき

充 みつる



いじめや不登校の問題を実証的に検証してきたほか、規範意識や社会性を育成する学校の実践でも数多くの成果がある。主著に『ピア・サポートではじめる学校づくり』（金子書房）のシリーズがある。

「規範意識」という語が教育関係者の間で用いられるようになってから、少なくとも六年以上が経ちます。たとえば、平成一六年から一七年にかけて児童生徒の重大な問題行動が相次いだことから文部科学省が発表した「新・児童生徒の問題行動対策重点プログラム（平成一七年九月）」には、「危険物の学校内への持込みの禁止をはじめとする学校内のルールを遵守させるなど、学校内の規律の維持とこれを通じた児童生徒の規範意識の醸成という観点から……」とあります。あるいは、平成一八年二月に公表された中央教育審議会の経過報告書（初等中等教育分科会）にも、今の子どもの課題として「問題行動が相当数に上る、規範意識、体力などに課題がある」との文言が見られますし、教育基本法の改正を受けた平成一九年改正の学校教育法でも、その二二条の一として、「学校内外における社会的活動を促進し、自主、自律及び協同の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」とあります。

堅い話から入りましたが、この頃から「規範意識」という四字熟語は、教育関係者の間で自明の事柄のように用いられるようになったと言ってよいでしょう。確かに「今どきの若者や子どもの規範意識は低下した」などと言われれば、その意図している主旨自体は容易に理解できます。

しかし、そうした漠とした理解で本当によいのでしょうか。そうであるなら、もっと普通な昔からの表現で、「公共心に欠ける」とか「相手を思いやれない」とか言うほうがよいのではないのでしょうか。あるいは、服装違反や違法行為を問題にしたいのなら、「問題行動や逸脱行動が増えている」と言うだけで済むのではないのでしょうか。なぜ、ことさらに「規範意識」という形で問題視するのか。そもそも「規範意識」とはどのようなものなのか。そのあたりを正しく理解しておかないと、議論は言うに及ばず、その対策までもが的外れになりかねません。

### 「規範意識」は教えられないものではない

実際、教育関係の会議や講演会等の場では「規範意識を教えていく必要がある」といった発言が増え、それを受けた取組も現れているようです。ところが、そうした言い回しを考えなしに受け入れて「規範意識」を教えようとする取組が増えるなら、今まで以上に「規範意識」を低下させていく恐れがあります。

詳しくは次節で説明しますが、いくら「規範意識」を高めたといえ、「教える」という形でそれが実現できるわけではないからです。それどころか、できると誤解して「規範意識と称する何か」の「教え込み」が続くなら、本来「規範意識」という語を用いて実現しようとするものとは相反する状態、すなわち表面的には「規範意識」があるように見えながら内面的に

は何も育っていないという、いわば「規範意識の空洞化」をもたらすことになりません。

たとえば、「自主性を教える」といった言い回しの奇妙さがわかるでしょうか。自主性を高めたくて「自主的に行動するように」と熱心に言い含めても、その結果とられた行動自体は「自主的なもの」とは限りませんし、「自主性が育った」と考えるわけにもいきません。もちろん、それをきっかけに「自主性に目覚める」ことを狙うという話ならわかります。しかし、「教えた」＝「育った」とはならないから、「自主性」なのです。「規範意識を教える」というのも同じような側面があります。教えて育つという具合にはいかないのです。

そうした誤った理解が生まれる理由の一つは、「意識」が「知識」と必ずしも無関係というわけではないからかもしれません。あるいは、学校という場、教師という人種は、そもそもが「教えたがり」だからなのかもしれません。そして、教えるとなるとすぐに「知識」、最近では「スキル（技能）」と安易に走りやすいからなのかもしれません。

### 「規範意識」とは

では、「規範意識」とはそもそもどのようなものなのか、何を問題にしたいか使われているのかを、改めて整理してみましよう。とりあえず、みなさんに馴染みがあると思われる「エコ意識 (Ecology-consciousness)」を手がかりに、「〇〇意識」なる表現について考えてみましょう。

エコ意識とは、エコロジー（自然環境保護）に対して高い意識を持っている、そのことを強く意識している、それを重視しているという状態を指す用語です。つまり、エコロジーに対する高い関心や自覚、さらにはエコが進むよう率先して行動する意欲がある様子、そのように行

動していることに喜びや誇りすら感じている状態等を指していると説明できます。

エコ意識の高い人はエコに関心があるわけですから、結果的にエコに関する知識をたくさん持っている可能性は高いでしょう。しかし、知識があるからエコ意識が高いとは言えません。知識があっても関心が低かったり、行動が伴っていなかったりしたら、エコ意識は低いと言わざるを得ないからです。反対に、限られた知識ではあっても、理解している範囲で精一杯行動しているなら、エコ意識が高いと言えるでしょう。また、結果的にエコな行動をしているとしても、自覚を伴っていないような場合、たとえば偶然そんな行動をしているだけだったり、時と場合で行動したりしなかったりというのは、エコ意識があるとは言えません。

「規範意識」についても、同じように理解することができます。まず、規範に関する知識があるかどうかは、それほど重要ではありません。あるに越したことはないのですが、その有無や量が問題というわけではありません。また、「規則を守っていること」や「規律正しいこと」等の行動面だけで判断することもできません。たまたまそうしているだけ、今のところ何かに違反してまでやりたいことがないだけ、ということかもしれないからです。

あえてこの語を用いる意図を考えるなら、次のように考えるのが妥当と言えるでしょう。すなわち、「規範意識」とは、規範（きまりやルール、モラル、法律等）に関する十分な知識があるかどうかはともかく、規範と呼ばれるものに対する高い関心や自覚があり、規範なるものを尊重し自ら進んでそれに従い、そのように行動することに喜びや誇りすら抱いている状態、と言えます。さらには、規範によって実現される「秩序が保たれた状態」を好ましく思い、それを大切にしたいという姿勢や意欲がある状態、とも言えるでしょう。

もちろん行動もしっかりと伴うべきなのですが、行動が伴わないことに恥じ入っているようなら、「規範意識」があると言つてよいでしょう。ここで重要視されているのは、規範を守っているかどうかという結果ではなく、守ろうとしているかどうか、守ろうとする気があるかどうか、それを支える自発的な態度や行動、素地が形成されているかどうか、なのです。

### 「規範意識」という概念から見えてくるもの

では、なぜ「規範意識」という表現を用い、先述のような「規範」を守ろうとする意欲や姿勢の有無、そうした素地が形成されているかどうか等を問題にするのでしょうか。その理由は、近年の児童生徒の行動や若者の不可思議な犯罪などについて考えると、わかってきます。

たとえば、次のような特徴を示す事件を耳にすることが増えていないでしょうか。

- ・ 殺人やひどい傷害事件等を起こしたにもかかわらず、それに匹敵する動機が見えない。
- ・ 原因やきっかけとなった事柄もなくはないが、それと実際の行為との間に飛躍がある。
- ・ 普段はおとなしくまじめで、きちんとあいさつもでき、特に悪い評判はなかった。
- ・ 子どもの頃も、非行グループに入っていた、暴力的な環境で育った等ではなかった。

要するに、犯罪に至るほどの深刻な動機も見あたらず、家庭の不適切な養育という昔ながらの非行の図式でも説明しにくい、いわゆる「いきなり型」と称されるような若者の事件。あるいは、一流大学に在籍しているにもかかわらず、大麻栽培を行っていた、「オレオレ詐欺」に加わっていたといったような若者の事件。少し前までは考えられなかったそうした事件を起こす若者を理解するうえで、「規範意識が育っていたかどうか」という視点が役立つのです。

彼らの多くは、高校までは大きな問題行動や逸脱行動を起こすことのなかった子どもでした。おそらくは、教師等に目を付けられることも、特別な指導を受けることもなく、罰を受けた経験もなかったことでしょう。彼らの学校時代を知る大人は、彼らが犯罪に向かうことなど決してない、と信じて疑わなかったことでしょう。なぜなら、彼らはトラブルを起こすことなく、規則に違反することもなく、普通にあいさつのできる子どもだったからです。

しかし、そうした教師の「見立て」とは裏腹に、彼らに「規範意識」は育っていないなかったのでしょうか。彼らが、たとえば万引きをしなかったのは、近くに手頃なコンビニがなくて機会がなかっただけ、特に欲しいものがなかっただけ、そういった逸脱行動に興味がなかっただけ、といったくらいの理由からであって、強い自覚のもとに規範に従っていたわけでも、ましてや規範を守ることに喜びや誇りを感じていたわけでもなかった、と考えられます。

そんな彼らの内に芽生えた欲求の中に違法となる行為が含まれていた時、彼らは次のように考えたと推察できます。その欲求を満たそうとすると法に触れるくらいの知識はある。しかし、自分のやりたいことを世間が違法と言っているに過ぎない。あえて法を犯したいというわけではないが、自分が我慢するのもバカバカしい。ちょっと一線を越える程度のことなのだからたかが知れている……。そんなふうと考えて行為に及んだところ、それが発覚してしまい、予想に反して見過ごしてもらえなかった、というような顛末だったのではないのでしょうか。

彼らが安易に法を犯したのは、抑止力となるものを自らの内に持ち合わせていなかったからです。「規範意識が育っていない」以上、一線を越えることへの抵抗感や彼らの内面には存在しないも同然です。学校で教えられた「借り物の道徳的知識」はあったとしても、悪い友だちが話していたり、ネットで見かけたりする「借り物の悪知恵」も持ち合わせています。学校や家庭で教え込まれた知識程度では抑止力にはならず、法を犯してしまったというわけです。

### 「規範意識」が育っていない若者や子ども

「規範意識」が育っていれば、当該社会・当該集団の一員として期待されている行動を自ら進んでとろうとし、そうでない行動に対しては違和感や疑問を感じることでしよう。また、そのような秩序の中にいることに安心感や満足感を覚え、その枠組みの中で自己実現を図ろうとすることに喜びや誇りを感じることでしよう。

当然、犯罪や逸脱行動に走ることは大きく減ります。言い換えれば、よほどの事情でもない限り、違法行為には手を染めません。一般の犯罪事件で動機が大きく問題にされるのも、そのためと言えます。つまり、「規範意識」を乗り越えてまで犯罪を犯したのはよほど強い動機があったから、と考えるわけです。ところが、さしたる動機もないのに犯罪に至る若者が増えていきます。その説明の一つが、「規範意識が育っていない若者が増えた」という見方なのです。

もちろん、「規範意識」が育っていないと必ず犯罪や逸脱行動といった大きな問題に至るわけではありません。結果的には、借り物の知識に従いながら何となく法の一線を越えないで生活する、大きくは越えないで生活できる、というほうが多いことでしょう。しかし、そうした事件にまでは発展しなくとも、日常の様々な集団生活の場面で小さなトラブルを引き起こしはするでしょう。今や、学校内で生じる問題行動の多くが「規範意識」の低下によってもたらされたり、増幅されたりしていると言っても過言ではありません。

私は、最近の子どもたちの精神年齢、とりわけ「知徳体」で言うところの「徳」に当たる部分に関して、実年齢よりも三歳程度幼い子どもが増えたと感じています。小学校六年生なのに、昔の小学校三〜四年生くらいの自覚が少なく、自分のことしか考えられない、自分がしたいことだけをしようとする、といった児童がいます。中学校三年生なのに、自分の言動がどのような影響を及ぼすのかに思い至ることができない、昔の小学生レベルの生徒がいます。こうした年齢相応の行動ができない子が増えたことで、程度はさほどひどくないものの、指導が通らなくて解決に頭を悩ませるトラブルが、以前と比べて大幅に増えているのではないのでしょうか。それらが何かの弾みで重大な問題や事件に発展する恐れは、今やどの学校にも存在します。

### なぜ「規範意識」は低下してきたのか

では、なぜ、近年、「規範意識」が育たなくなってきたのでしょうか。

もともと「規範意識」は教えられるようなものでないことは、先に触れました。かつての子どもは家庭や地域の中で自然にそれを身につけ、大人になりました。昔の親や教師は「規範意識」に相当するものをきちんと「教えてきた」かのように話す人もいますが、それは疑問です。家族や近隣の集団生活を通して、きまりやしきたりは守るべきこと、それによって集団がうまく成り立っていくこと、きちんと行動すれば一人前扱いされて誇らしいこと等を感じとりながら育つことで、問題となる行動が抑止されてきたと考えるほうが自然です。

ところが、時代や社会の変化の中で、近隣の関係はすたれ、親戚づきあいも減り、核家族化や小家族化が進み、そうしたものを自然に身につけられるはずの集団生活を体験しないまま育つ子どもが増えてきました。学校では昭和三〇年代から道徳教育を行ってはきたものの、それは「補充・深化・統合」と表現されることからわかるとおり、一定の素地を子どもが獲得していることが前提です。しかし、家庭や地域で素地が形成されてこないとするなら、そうした道徳教育もかつてのような成果は期待できません。

トラブルを起こす子どもが次第に増える中、道徳的な知識の注入を図ったり、あいさつ運動等で半強制的にあいさつさせたり、最近ではスキル訓練を取り入れたり、様々な工夫も凝らされてはきています。しかし、そうした対応では成果が上がらない理由も、それが逆効果になりかねないという懸念も、「規範意識」について正しく理解できていけばわかるはずです。

「規範意識を育てる」ということは、子どもの内に、規範に対する関心や自覚、秩序を尊重しようとする姿勢や意欲、規範に進んで従う自分に喜びや誇りを抱いている状態が生まれるようにすることです。だから、彼ら自身がそうした感覚に「目覚める」ことなしには、外から知識だけをいくら与えようと、表に現れた行動(形)だけをいくら整えようと、「その場しのぎ」や大人の「自己満足」でしかありません。

しかも、皮肉なことに、表面的な知識が増えたり表向きの形が整ったりすることで、事態はますます深刻になります。つまり、「規範意識が育っていない」にもかかわらず、傍目には「育っている」かのように見えるため、大人はそれ以上の働きかけも問いかけもしなくなってしまうからです。その結果が、初めのほうで触れた「規範意識の空洞化」です。

あいさつのできるまじめな若者が、なぜ奇妙な犯罪を犯すのか。一番の要因は、時代や社会の変化の中で「規範意識」を自然に身につける機会が減ったことです。しかし、もう一つの要因は、

心を育てることを忘れて、あるいは、心を育てているつもりで、結局のところ「手っ取り早く形を整える」ことばかり追い求めてきた教育の在り方にある、とも言えるのではないでしょうか。

### 「規範意識」を育むには

思いやりについての知識などなくとも、相手を大切にしたいという気持ちさえ存在すれば相手を思いやることはできます。最も大切なことは、子どもの心の中に、相手に対する関心や相手のことを大切にしたい、気遣いたいという欲求が目覚めることです。

心が先であれば、知識やスキルは他者との関わりの中でおのずから身につくものです。もちろん、それが足りなければ補うこともあってよいでしょう。しかし、せっかくの思いやりの心がうまく活きるために知識が求められ、確実に伝えるためにスキルが必要になる、というのが自然な順序です。心が欠けていたり貧しかったりする状態を放置しておいて、知識やスキルがその代わりになるとか、そこから心が芽生えるなどと都合良く考えるのは誤りです。そうした主張は耳にするものの、実際に成功したという話は聞かないはずで。

子ども自身が他者から大切にされたり、気遣われたりしていることに気づき、それを心地よいと感じ、ありがたいと感じること。そして、自分を取り巻く集団や社会に対する愛着が生まれ、自分もその中で役に立ちたい、認められたい、との思いが湧いてくること。実際に必要とされることの喜びや、役に立てたときの充実感。そうした気づきや自覚をもたらしするような日々の体験や環境を整えることが、何よりも大切なのです。

とは言え、これからも、多くの人々は「規範意識が乏しいから、積極的に教えていくように」

と言い続けることでしよう。道徳的な知識を教え込めば道徳的な行動をする、道徳的なスキルを教えることで道徳的な行動ができる、と主張し続ける人々も後を絶たないことでしよう。

そうした誤解を払拭するには、「規範意識」の代わりに「規範感覚」という表現を使うことも、一つの手かもしれません。Norm-consciousと表現する代わりに A sense of norm と表現しても、英語圏においては意味が変わるわけではありません。しかし、「規範意識」を「規範感覚」と表現すれば、知識やスキルを教え込めば解決すると考える日本人は減る可能性があります。形ではなく心、知識ではなく感覚。そう考えることができれば、正しく育っているかどうか見きわめたり、どうすれば育まれていくのかを考えたりしやすくなるかもしれません。

植物の種子は、温度や水分という環境が整えば、おのずから発芽します。もともとそのような力を内に秘めているからです。今の子どもも同じことで、内には自発的な力を秘めています。時代や社会が変わったからといって、子どもが変質したわけではないのです。その証拠に、適切な場や機会を学校が提供すると「規範意識」や社会性が育まれて問題が減ることが、国立教育政策研究所が実施してきた研究によって繰り返し確認されています。

しかし困ったことに、大人や専門家の力で子どもを「助けてあげたい」と考える「治療的な発想」や、「変えてあげよう」と考える「開発的な発想」により、「自ら目覚める」ための子ども主体の取組を、「教え込む」「ひきだす」という大人主導の取組に変質させている事例が散見されます。「子どもの育ちを支える」という「教育的な発想」に立つところから始めなければ、子どもの内に自発的な「規範意識」や「規範感覚」は育まれていきません。育むべきは、知識やスキルではなく、心であり感覚であることを理解して取組を行ってほしいものです。